



クサイヤマ

2月22日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

2月22日のおはなし「クサイヤマ」

「なんじゃそりゃあああ！」

川島刑事が吠えた。彼はまだ若く、こういう事態に慣れていないから、感情がすぐ表に出てしまう。しかし被疑者の前で刑事が感情を見せるのは好ましくない。藤見田警部補は短く、川島！と呼ぶと、しょっぴけと命じた。「でも、しかし」と口ごもる川島刑事に、藤見田警部補は、かまわん、容疑を認めているんだからと有無を言わさず連行させた。

堂々巡りだ。藤見田は思う。この事件は一向に先に進まない印象がある。これでもう何人つかまえただろうか。そしてそのたびに繰り返される間の抜けた展開。手錠をはめられながら男が「クソ！」と短く叫び、「うまいこと言ってんじゃねえ！」と川島が怒鳴りつけるのが聞こえる。こういうの何て言うんだっけ。デジャ、デブ……。何度も繰り返されたように思う光景だ。

徒労感の中で藤見田警部補はくるまに戻り、運転席に座るとこめかみのあたりを揉む。本ボシではないだろう。本ボシであるわけがない。すでに検察の調べで資金の流れははっきりしている。場所は大胆にも混雑時の山手線の中。あとは誰がそれを実行したかだけが問題なのだ。受け取った側は相手に会っていないからわからないと主張している。会わずにそんな大金の実弾を受け渡しするなど考えられない。

ほとんど無意識のうちにくるまを発進させ、藤見田が向かったのは山間部の森林地帯を走るコースだった。夜間、ヘッドライトの光だけを頼りにうねうねと曲がりくねる山道を走る、それが目的だ。次の角で無灯火の車輛に出くわすかもしれない（事実、何度もそういうことはあった）。いきなり道を横切って鹿が飛び出してくるかもしれない。目の前に不意に月が出現して度肝を抜かれることもある。それがいいのだ。

夜の森を走ると、どこか他の世界に迷い込んだような気持になる。しかし藤見田の場合、これは単なる現実逃避ではない。頭の働きがいつもとは違った風に切り替わるのだ。常識的な思考から離れ、大胆な結びつきを見つけ出し、まったく違った角度から光を当てることができるようになる。過去に藤見田が解決して来た数々の事件の多くで、この夜間の森林ドライブが貢献していることを知る者は少ない。

しかしこの事件に限って、なぜかこのドライブが効果を上げない。藤見田はラジオをつけるが、夕方山手線で発生した異臭騒ぎの話にくどくどとやっていてラチがあかないので、すぐに消してしまふ。まるで悪夢の中を彷徨っているように、同じような展開が延々と繰り返されるのだ。そういえば、このところ、いつも同じ山道を走っている気がする。山を変えればいいのかもしれん。

その瞬間、藤見田は気づく。そうだ。ヤマを変えればいいのだ！ おれたちはひとつのヤマに捕われ過ぎていた。違うのだ。探すべきは小島議員不正献金疑惑ではなかったのだ。ほとんど無意識のうちに藤見田は車を飛ばし、山を降り、気づくと携帯電話を片手に川島刑事を呼び出している。わかったぞ。またですか。またですかというやつがあるか。でも警部補、いつもいつもこんな時間に。黙って聞け。なんですか。ヤマがちがうんだ。なんですって？ 先月の帝国法律家協会事件を覚えているか。鷺津弁護士ですか。そうだ。あの隠し実弾の鷺津……あっ！

ただちに逮捕状を手配し、鷺津弁護士の自宅に向かう。何もかも結びつく。証拠もとっくに揃っていた。どうしてこれに気づかなかったんだろう。藤見田はくるまを飛ばしながら、舌打ちをしたくなる。しかし、これでもう何もかも解決だ。鷺津邸の前につくと、すでに川島が3台のパトカーを率いて到着している。見ると玄関が開き、川島と鷺津が口論している。藤見田は階段を駆け上がりながら、また既視感に捕われる。

川島が叫ぶ。

「おまえがやったことはわかっているんだ！」

「なにを根拠に」

「場所は山手線の中。証拠は上がっているんだ」

「山手線の中？ あ。す、すみません。え？ でも、あなたがた」

その瞬間、藤見田にはいやな予感が戻ってくる。まただ。また同じことの繰り返しになる。しかし若い川島刑事は居丈高になって問いつめている。

「覚えがあるだろう」

「はい。しかし、それでどうして検察が異臭騒ぎを」

「異臭騒ぎだと？」

「ええ、あの、夕方の」

藤見田は観念して眼をつぶる。まただ。また同じことの繰り返しだ。

「実弾攻撃したことに間違いないだろうが！」

「じ、実弾って、刑事さん」

「何を笑っている！、実弾じゃないのか？ え？ どうなんだ！」

川島刑事の言葉に、観念した様子 of 鷺津が答えるのが聞こえる。藤見田はそれを一言一句当ててみせることができるだろう。

「ええ。あの、すみません。おならをしたつもりが…」

「なんじゃそりゃあああ！」

(最初に戻る)

(「おならをしたつもりが…」 ordered by たいとう-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

クサイヤマ

<http://p.booklog.jp/book/44779>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44779>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44779>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.